

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 10 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520092

研究課題名（和文）ロマネスク柱頭彫刻の基礎研究：形体と図像と建築空間との関係について

研究課題名（英文） A Study of Romanesque Capitals: the Relation of Form and Iconography to Architectural Space.

研究代表者 常田 益代 (TOKITA MASUYO)
北海道大学・名誉教授

研究者番号：80291847

研究成果の概要（和文）：ロマネスクの柱頭は建築部材であると同時に説話図像の舞台ともなった。本研究は説話柱頭を教会堂内部の位置と機能に緊密に関係する二面、三面、四面柱頭に分類し、建築空間の中でどのように扱われたかについて考察した。その結果、説話 cp の図像の選択と配置、画面構成には教会堂の様々な場所の課す構造的条件と機能に加え、光（光量、採光条件）と見る者の動きと視点が重要な条件として考慮されていたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In addition to being structural, Romanesque capitals offered a stage for narrative scenes. This research analyzes narrative capitals in architectural spaces by grouping them into 2-face, 3-face and 4-face capitals, forms that are closely related to their locations and functions in a church building. The results indicate that the quantity and direction of light and the movement of the audience were crucial factors determining the choice and arrangement of iconography as well as composing iconographic elements around the limited surface of a capital.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：ロマネスク、彫刻、柱頭、教会建築、キリスト教図像、形体学、説話、修道院

1. 研究開始当初の背景

西洋美術史でロマネスクと呼ばれる時代はほぼ1000年から12世紀の後半までの150年余りで、さほど長くはない。しかし、ロマ

ネスク期の彫刻師たちは独創的な造形表現で柱頭を彫り、柱頭が従属する建築空間に特異な性格を与えていった。それはロマネスク柱頭が、柱頭＝葉飾り柱頭という古代以来の

通念とカノンを越え、歴史・説話場面の舞台になったことから窺える。

柱頭彫刻は扉口のテュンパヌム彫刻のような主役の位置を占めるものではない。柱頭はまず建築部材であり教会堂のあらゆる場所に配置される。しかも柱頭は建設工事の進行にともなって次々に供給されねばならない。こうした条件にも関わらず、柱頭はその限られた胴部に自由に時には奇想天外とも見える造形でこの時代の精神性の様相を雄弁に表現している。本研究者は、柱頭彫刻の示す多様性と独創性は扉口彫刻を補完するものと考え。また世界的に見ても、柱頭研究はモノグラフまたは特定地域における柱頭の形体分析の視点から扱われており、柱頭論という基礎的研究はなされてこなかった。

2. 研究の目的

本研究の最終目標は、ロマネスク柱頭にみる画面構成と造形表現の軌跡を、その黎明期から終焉期にいたる展開の中に追うことである。そのための一段階として本研究期間内では、説話柱頭にみる画面構成の原理を建築空間と不可分の関係として観察・検証し、次の点を明らかにする。

- 1) 建築構造部材としての柱頭の形状と特性
- 2) 柱頭に共通する特性と見る者との関係
- 3) 説話柱頭の誕生
- 4) 説話図像の選択と配置場所
- 5) 説話柱頭のプログラミングの可能性

3. 研究の方法

本研究は柱頭の画面構成を二つの前提条件から考察した。一つは構造的・物理的な条件で、建築構造と配置場所が要求する柱頭の大きさと形状の違いである。つまり柱頭胴部の面はクリプト、内陣、交差部、翼廊、身廊、側廊、扉口、回廊などの場所により二面、三面、四面と異なる彫刻面になる。もう一つ

は流動的な条件で、各々の場所のもつ機能や柱頭を見る者の視点の動き、さらに光の変化といった非物質的なものがある。こうしたさまざまな条件の下で制作された柱頭の観察は、主に現地調査の通して進めた。

4. 研究成果

1) 建築部材としての柱頭の形状の特性

柱頭は石造建築の支柱とその上部の構造体を結ぶ役割を果たす。11世紀に入り教会堂の木造天井が石造ヴォールト構造へと移行すると、身廊と側廊を分かち支柱の四方に付柱をつけた複合柱が多用されるようになり、柱頭の需要は急増した。

柱頭は建物のどこに使われるかにより、二面柱頭（扉口、高窓の角など）、三面柱頭（支柱の付柱、側廊壁など）、四面柱頭（周歩廊や回廊の独立柱）となる。柱頭のもっとも基本的な形状は、円形の底部と正方形の頂部をもち、その間の胴部で円形から正方形に移行する。柱頭はアーチの迫元を受ける冠板支えるため、柱頭頂部の四隅は要所となる。半円形の平面をとる付柱の上の柱頭であるなら、上記柱頭の半分の三面柱頭となり、扁平な片蓋付柱の場合は小さな矩形底部から大きな矩形頂部へと移行する逆台形の形状となる。

2) 柱頭に共通する特性

柱頭彫刻に共通する特性として次の点が挙げられる。第一に、柱頭自体は三次元の立体であるが、その表面に彫刻される装飾・形姿像・図像は、彫りの高低にかかわらず、柱頭の表面から完全には離脱できない二次元的の浮彫りであること。第二に、人間の目は柱頭の二面しか同時にみることができないこと。それゆえ、時間の要素を含む説話主題が柱頭の三面もしくは四面に連続的に示されたとしても、話の展開を一度に視界にいれ

ることはできず、見る者は柱頭の回りを移動しなければならぬが、回廊のように移動を妨げる障害物がある時は、話の展開は中断されてしまう。第三に、柱頭が立体であることは同時に自己完結性の単体であることを意味し、四面柱頭であれば話の進行は元の出発点に戻ってしまう。このため柱頭は本来的に一方向に進むサイクル図像に適した形体ではない。

柱頭の形体と見る者との間にこのような関係があるにもかかわらず、ロマネスクの彫刻師たちは柱頭胴部に壁面のサイクル図像とほぼ同じ範囲の図像（旧約聖書、新約聖書、聖人伝、史実、寓話、異教や世俗の出来事に題材したもの）を表わしていった。数次におよんだ現地調査では、説話柱頭の誕生から成熟期までを二面、三面、四面柱頭という形状ごとに観察した。その際、採光角度と光量、また見る者の動きと視点を念頭においた。

3) 説話柱頭の誕生について

本研究で確認できたことの一つに、ロマネスクの説話柱頭は葉飾り柱頭の中に形姿像がすこしずつ加わり説話柱頭になったのではなく、早くも11世紀前半というロマネスク初期の段階で表現力に富む説話柱頭が突如出現し、葉飾り柱頭の歩みと平行してさまざまな場所を占めていったということがある。バイユー大聖堂の交差部にあった大きな説話柱頭の一つは、『不信のトマス』を示し、柱頭の中央に正面向きのキリスト立像を置き、その左右に柱頭の両側の稜線に合わせて使徒トマスとペトロを配置するという明解な構成を示す。サン・ブノワ・シュール・ロワールの玄関廊にもヨハネの黙示録、キリスト伝、聖人伝を表す多数の説話柱頭が一举にあらわれる。パリのサン・ジェルマン・デ・プレの身廊にあった説話柱頭群は、柱頭の胴部を滑らかに動く人物像を堂々と示す。柱頭

の一つは、扉口テュンパヌムの図像を先取ったかのように『荘厳のキリスト』像が柱頭の正面を占める。こうした説話柱頭が11世紀前半から中頃にかけてひとたび出現すると、柱頭の形状にあわせて、彫刻師たちは創造性豊かな試みをその後100年間ほどつづけることになる。

4) 二面柱頭の場合

二面柱頭は高窓の両側や扉口の脇壁(jamb, pied-droit)に用いられる。高窓の柱頭は比較的小さく、高いためほとんどが葉飾り柱頭である。扉口の脇壁に並ぶ柱頭は二面でありながら、二つの面が同じ面積をもつ。また、低い位置で並ぶため、見る者は教会堂への入り時に柱頭の正面から側面へ、側面から正面へと二つの面を外光の中で連続して見ることができ、柱頭としては説話に適した条件である。こうして隣りあう複数の柱頭、または扉口をはさんで向かい合う柱頭は、扉口の前に立つ世俗の人々を対象とした連続性のある図像を示す。扉口二面柱頭の特性を究極的に追求したのがロマネスクからゴシックへの移行期に制作されたシャルトル大聖堂西正面「王の扉口」の柱頭フリーズである。

オータンの北扉口を例にとれば、左右の脇壁にそれぞれ2つずつ柱頭があり、図像は向かって右から『悪しき金持ちと哀れなラザロ』、『ナインの寡婦(?)』、扉口を挟んで『放蕩息子の帰還(?)』、『アブラハムに抱かれるラザロ・地獄の金持ち』である。外側二つの柱頭は角柱にのる台形二面柱頭で、内側の二つは円柱の上の半円二面柱頭である。すこし離れた位置から扉口正面を見ると、外側の二つ柱頭の正面、すなわち右の『悪しき金持ちの晩餐』と左の『地獄に墮ちた金持ち』が同時に見え、これらの柱頭の側面は見えない。扉口に近づいてはじめて柱頭側面の『哀れなラザロ』(右)と『アブラハムの胸に抱かれ

たラザロ』(左)が見える。つまり、ラザロの話は隣接する柱頭へと連続するのではなく、扉口の両側で向かいあう同型の柱頭に連続し、各場面の因果関係を明示している。これらの柱頭を見て扉口から聖堂内にはいると目の前にラザロの墓があった。

扉口は俗の世界から神の家である聖の世界へ入る境界線である。まず、テュンパナムに『キリストの再臨』や『最後の審判』といった教義的な神の顕現を示し、それを支える柱頭やコーベルには「悪魔祓い」を置くことが多いが、その他にもこの境界を意識させる道徳的・教訓的な図像、すなわち『金持ちラザロ』『吝嗇』『淫乱』『悔悛』『贖罪』といった図像がこの時代を通じ広く散見する。

5) 三面柱頭の場合

三面柱頭は教会堂の玄関廊（ポーチ、ナルテックス）や身廊の付柱に用いられ、数の上からもっとも多い。三面説話柱頭が早くも11世紀前半にサン・ブノワ・シュル・ロワール修道院聖堂の玄関廊に現れた事はすでに言及したが、すこし遅れて内陣に聖ベネディクト伝のサイクル図像が現れる。この図像選択と配置は、修道院の縁起とあわせて特記すべきだろう。

身廊における説話柱頭がもっとも多いのは、ブルゴーニュ地方のオータンとヴェズレーである。前者が司教座のある大聖堂で後者が修道院という運営組織の違いは図像の選択にも反映されている。さらに、両者の建築構造の違いは内部空間の光量と柱頭の形状のみならず、柱頭の見え方にも決定的な違いをおよぼしている。

オータンの身廊はきわめて暗く、交差部と内陣のみ十分に採光されている。これはアプシスの方位が例外的に南に向いていることと、高窓部に小さな窓が一つしか開いていないことに起因している。一方、交差ヴォール

トを架けたヴェズレーの身廊は高窓からじゅうぶん光が入り身廊の柱頭（両側廊壁の柱頭を除く）を、ほぼ均質に照らしている。

こうした条件の下で、オータンの身廊には片蓋付柱が受ける72の柱頭があり、原則として葉飾り柱頭は側廊に面した付柱に、説話柱頭はアーチ列の内輪で向かい合う付柱に配置されている。図像の範囲は旧約が12、新約が10、聖人伝1、その他1という構成をとり、図像の選択と配置は任意にみえる。一方、祭壇に向かって左側の支柱とその周辺にキリスト幼児伝がミニサイクルを形成する。北扉口（実際は方位が90度ズレているため東に位置する）から聖堂内に入ったときまず目にはいる北支柱北面の『ヘロデの前のマギ』からサイクルは始まり、その対面の『マギの礼拝』を通過して斜め前方の北支柱東面の『マギの夢』へ移動し、最後に向かい合う『エジプト逃避』へと連続する。北扉口から翼廊そして内陣に通じるこの場所のみ説話ミニサイクルが形成されているのは、採光がよいこと、公現祭の宗教劇がおこなわれる位置と呼応していること、巡礼者が入ってくる方向であることなどが推察される。また、幼児伝の説話柱頭はどれも「幼児伝の彫刻師」の手になり、オータンの柱頭の中でもっとも優れたものである。これに対し、祭壇右側の支柱には怪鳥をふくむ柱頭がまとめられている。幼児伝と怪鳥シリーズの関係を探るのはむずかしい。

ヴェズレーの身廊と側廊の付柱には96の柱頭があり、うち旧約聖書出典が22、新約が3、聖人伝が11、その他(異教神話、寓話、擬人像、同定不可能な怪物など)が30、葉飾りが30である。ヴェズレーの図像選択にみる旧約図像の偏重と新約の少なさは未解決の問題である。擬人像と怪物の不可解な図像は修道僧への戒めを意図したものでしょうか。旧

約は『創世記』と『出エジプト記』の場面がほとんどで、西から数えて5-7ベイの支柱の周囲に緩やかにまとまっているが、説話場面の進行はいくつかの支柱を飛び越えることもある。聖人伝は身廊7-9ベイに特に多く、なかでも『砂漠の隠者パウロと聖アントニウス』の説話伝は、北支柱7と北廊壁でミニサイクルを作る。同種の図像が身廊の東西軸だけで連続するのではなく、横の繋がりを含めた一定のゾーン内に集められていることは、ヴォールト架構をとまなう建設プロセスとそのゾーンを請け負った工房との関連を示唆しているかもしれない。

ロマネスクを代表するオータンとヴェズレーの身廊に説話柱頭の図像選択とその配置に関する原理を導きだすことは難しい。しかし、三面柱頭に説話画面を構成するに際し、葉飾りは建築モチーフと並んで、場面設定、場面展開、空隙の充填などさまざまな働きをしている点は特徴として挙げられる。

6) 四面柱頭の場合

四面柱頭はクリュプタと周歩廊、そして回廊の独立柱に使われるが、それぞれの柱頭に課せられた条件はまったく異なる。

クリュプタにはもっとも早くからヴォールト構造が用いられ、ロマネスク黎明期の独立柱が現存する。これらの独立柱の中には人面などの形姿像も現れるが説話柱頭はまだない。

祭壇背後を囲む周歩廊とその周辺に位置する柱頭が説話図像を扱う場合、三面柱頭の場合も四面柱頭の場合も、典礼との関わりを示す柱頭がある。早くも11世紀後半にコンクのサント・フォワ修道院教会の周歩廊に『アブラハムの供犠』（三面柱頭）が現れる。オーベルニュ地方、サン・ネクテルやイソワールのサン・オストロモワヌ修道院教会の四面周歩廊柱頭が示すキリストの受難伝の

サイクル図像は典礼との関係を示す代表例である。

祭壇を囲むように半円形に配置された周歩廊柱頭の四面に展開する説話サイクルの見え方は、交差部側に立って複数の柱頭の図像を見る時と、周歩廊側を歩きながら放射状祭室に面した柱頭背面の図像を見る時では大きな違いが生じる。どちらの場合も、時間軸にそった物語の展開が妨げられ、複数の場面が飛び越される現象が生じる点は同じであるが、祭壇側から見る定まった視点では、柱頭胴部を一巡する場面は中断されるが、かわりに左右で隣り合う柱頭の場面が視界にはいることになる。それゆえ、時間の流れにそった場面展開よりも、祭壇に面する場面相互の意味が重要になる。これに対し、周歩廊を半円形に移動しながら見る時は、物語の見え方自体も進行とともに変化するためいっそう複雑になる。まず周歩廊を構成するすべての柱頭は少しずつ角度の異なる面を歩行者に見せることになる。さらに歩行者の位置から離れた柱頭の祭壇側の面とすぐそばの柱頭の背面が同時に視界には入り、この関係が歩みとともに変化しつづける。

同じ四面柱頭であっても、回廊の柱頭はまったく異なった条件の下で構成されねばならない。回廊柱頭に特有の条件として、①設置位置が低いこと、②中庭と歩廊の間に低い仕切り壁があるため柱頭の周囲を回って四面を連続して見るができないこと、③柱頭の歩廊側の面は常に逆光線をうけ、ほぼ一日中、図像が見にくいこと、④柱頭は比較的小さく、しばしば二つの柱身の上で2つの柱頭が連結する。この場合四面柱頭の歩廊面と中庭面が狭く（縦長）、側面が広く（横長）なること、が挙げられる。

モワサックを例とすれば、説話柱頭は双身柱にも単身柱にも用いられている。どちらの

場合も中庭からの光を柔らかく受ける柱頭
胴部の両側面に主場面を配置し、ふたつの主
場面をつなぐ中庭面と歩廊面を見なくても
図像の意味が十分わかるようにする(例:「カ
ナの婚礼図」と「カナの奇跡」)。また、主場
面への連続のしかたは様ではないが、逆光
をうけてみにくい歩廊面には、しばしば説話
舞台の出発点または帰結点となる建築モチ
ーフが配置されている。回廊柱頭の提起する
さまざまな問題は今後の研究テーマとして
さらに詳しく考察していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計2件)

Tokita Darling, Masuyo. “Grands vestiges du
portail de Cluny III.” *Histoire, Antique &
Medievale*, (査読有) vol. HS. No. 30, 2012, pp.
19-21.

Tokita Darling, Masuyo. “Vézelay: Sketch Plans
by K. Conant and 3D Modeling as a Research
Tool”, *Actes du Colloque International
Arch-I-Tech 2010, 17,18,19* (査読有), 2011, pp.
179-190.

[学会発表] (計5件)

Tokita Darling, Masuyo. “Vézelay: Processus de
construction et hypothèses en modèles 3D.” (招
待発表)、国際学会 Colloque Arch-I-Tech
CLUNY、2010年11月19日、Cluny, France.

常田益代「ロマネスクの柱頭彫刻：説話柱頭
の図像と配置について」、キリスト教文化研
究会、2010年3月20日、藤女子大学、札幌

Tokita Darling, Masuyo. “Note on preliminary
observations of sculpture at the former Cluni
a柱頭riory, Charlieu.” (招待発表) 国際学会
*Hugues de Semur, Paray-le-Monial
et l'Europe clunisienne (XI^e-XII^e)*, 1er
au 4 Octobre 2009, Paray-le-Monial,
France.

Tokita Darling, Masuyo. “La galilée de Made
leine, Vézelay: ses fonctions, iconographie et
restitutions.” Colloque international, (招待発表
) 国際学会 “*Hugues de Semur, Paray-le-Moni*

*al et l'Europe
clunisienne (XI^e-XII^e)*, 1er au 4 Octobre 2009,
Paray-le-Monial, France.

Tokita Darling, Masuyo. “Nave Bases of Véz
elay: An Approach for the Reconsideration of
Building Campaigns.” The 44nd International
Congress on Medieval Studies, May 7, 2009,
Kalamazoo, U.S.A.

[図書] (計1件)
六田知弘 & 常田益代、『石と光--シトーのロ
マネスク聖堂』平凡社 2012年、104頁

[産業財産権]
○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

常田 益代 (TOKITA MASUYO)
北海道大学・名誉教授
研究者番号：80291847

(2) 研究分担者

()
研究者番号：

(3) 連携研究者

()
研究者番号：